沖縄市文化財調査報告書第３集

尚宣威王の墓

1980年　３月

沖縄市教育委員会

沖縄市文化財調査報告書第３集

尚宣威王の墓

尚宣威王の墓の石棺の拓本

もくじ

尚宣威王の墓……1

調査の概要……2

見　取　図……4

案　内　図……5

内　部　図……6

尚宣威王について……13

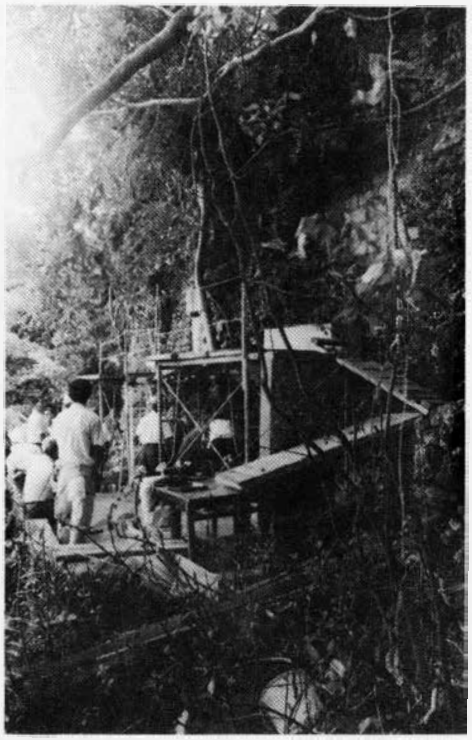
尚宣威王の墓

●**所在地**　沖縄市字越来那志原1,085番地

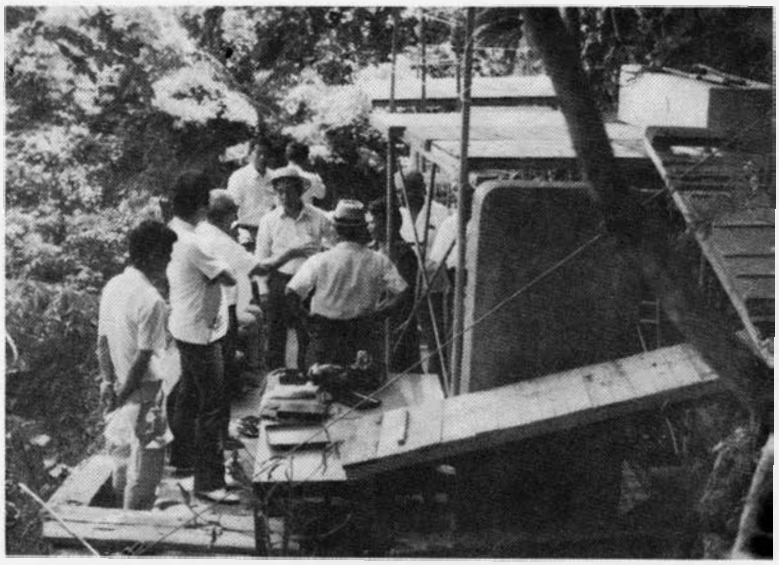
●**管理者**　湧川静子（那覇市字寄宮314番地）

調 査 の 概 要

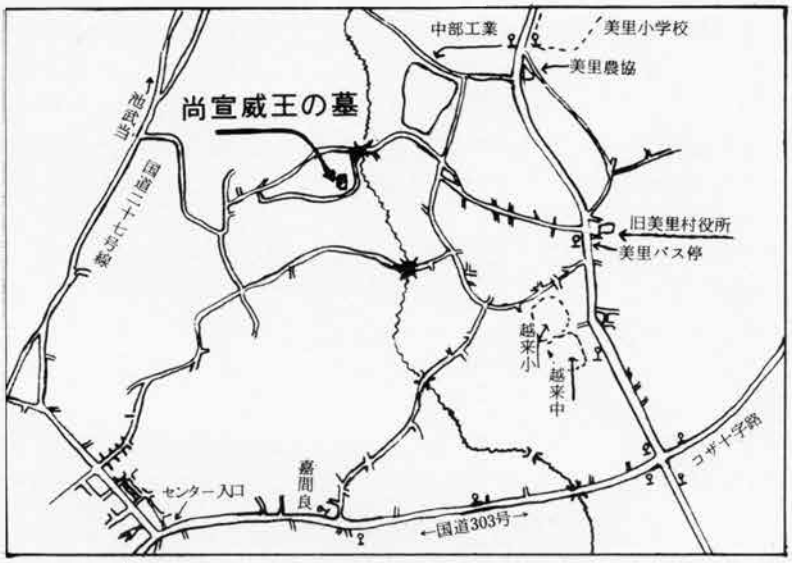
尚宣威王の墓の調査が昭和54年９月16日午後１時から沖縄市教育委員会の手によって行われた。調査主任には名嘉真宜勝読谷村立歴史民俗資料館長があたり、沖縄県史料編集所の高良倉吉氏や市文化財調査審議委員、市社会教育課職員の手によって調査が実施された。尚宣威王の墓は、字越来那志原のセーシャー川をのぞむ崖の中腹にあるため、調査には強固な足場を必要とし、更に囲い込み墓の墓石がわずかブロック３個分の大きさしかないために墓の内部には大人が２～３名しか入れなく調査に時間を要した。墓の内部は天井の高い所で123㎝、幅280㎝で、入母屋式石製厨子が２個あった。その１つは、寛文４年（1664）の銘があり身前面２ケ所に文字、刻文があり、残りの棺は銘がなかった。



墓が崖の中腹（約３ｍ）にあるため強固な足場を設営して調査に着手した

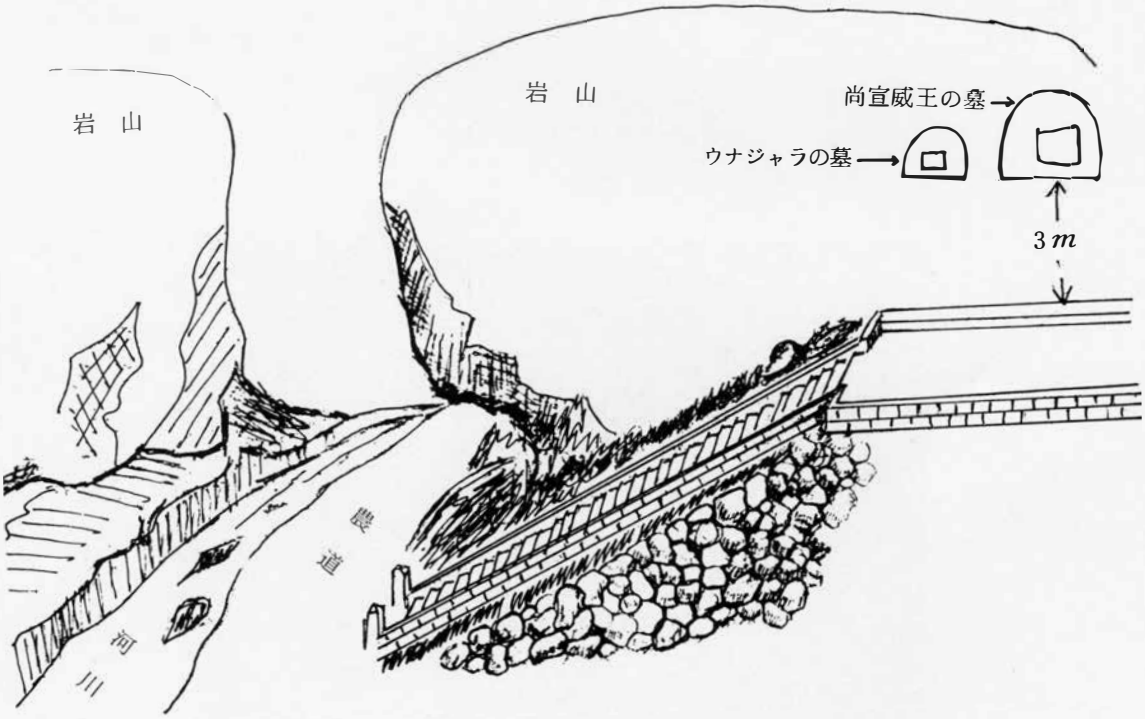


見取図

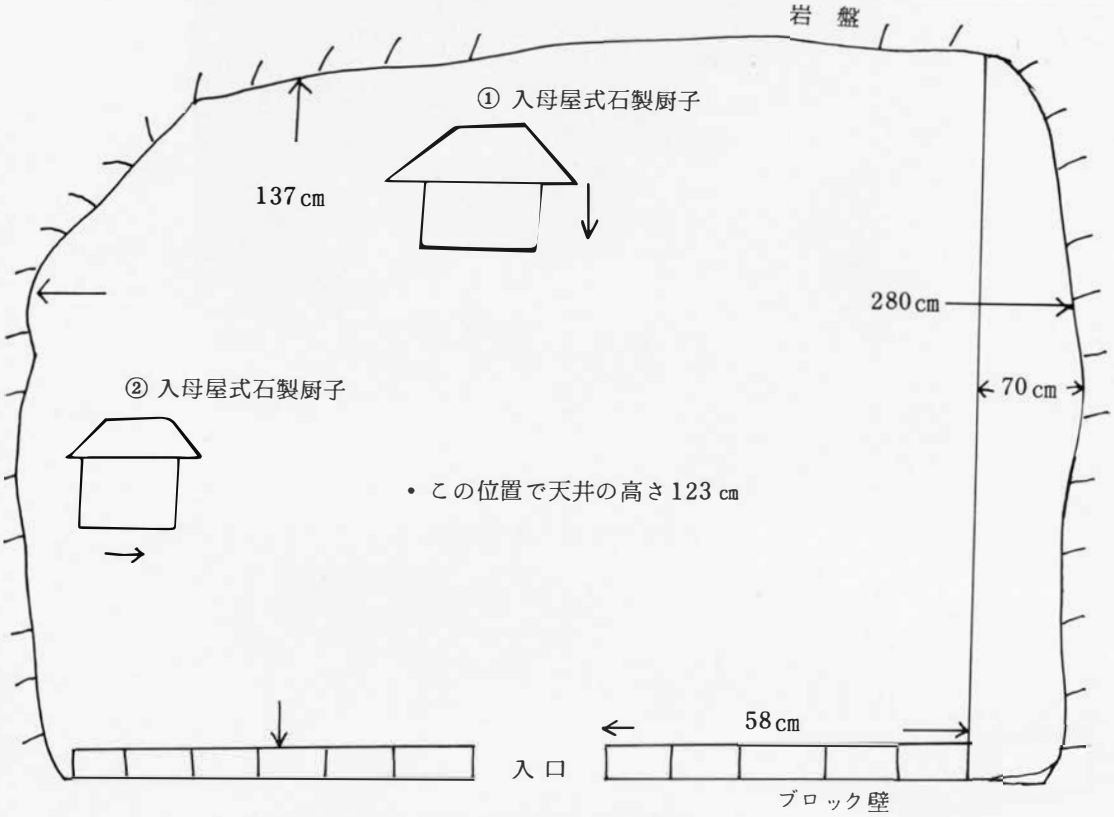

中部工業
美里小学校
美里農協
尚宣威王の墓
池武当
国道二十七号線
旧美里村役所
美里バス停
越来小
越来中
コザ十字路
嘉間良
センター入口
←国道303号→

尚宣威王の墓へ昇る階段

尚宣威王の墓案内図

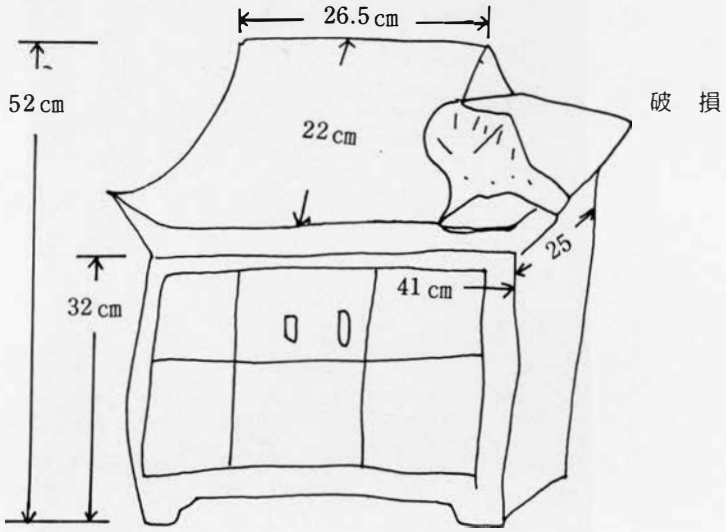


尚宣王の墓内部図



※ 墓口の巾はブロック1個分の長さ　約30㎝。
高さは3個分　60㎝。
顔面はブロック5個を積んでいる。上方のスキマはセメントで塗ってある。　高さ124㎝。

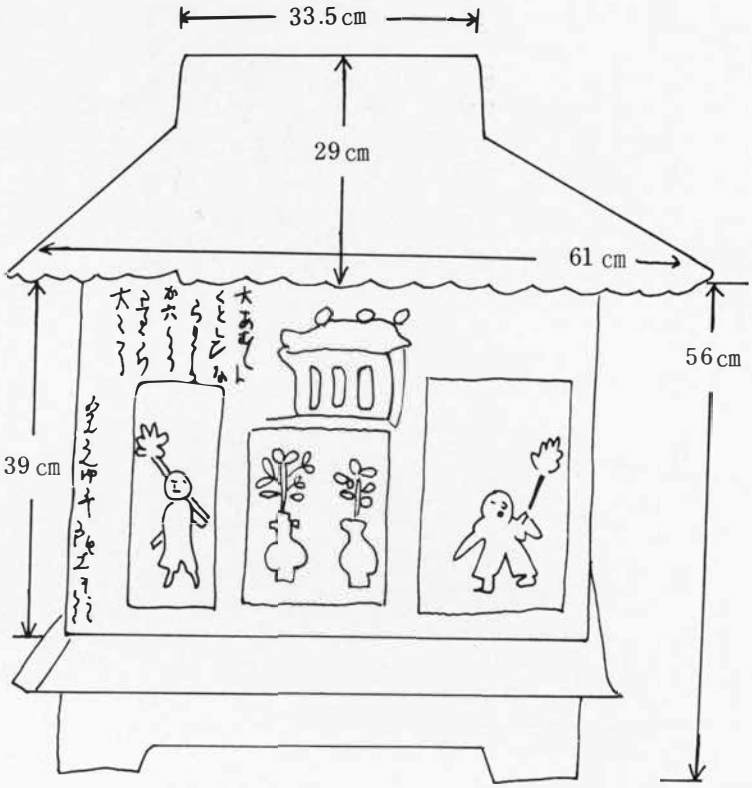
① 入母屋式石製厨子



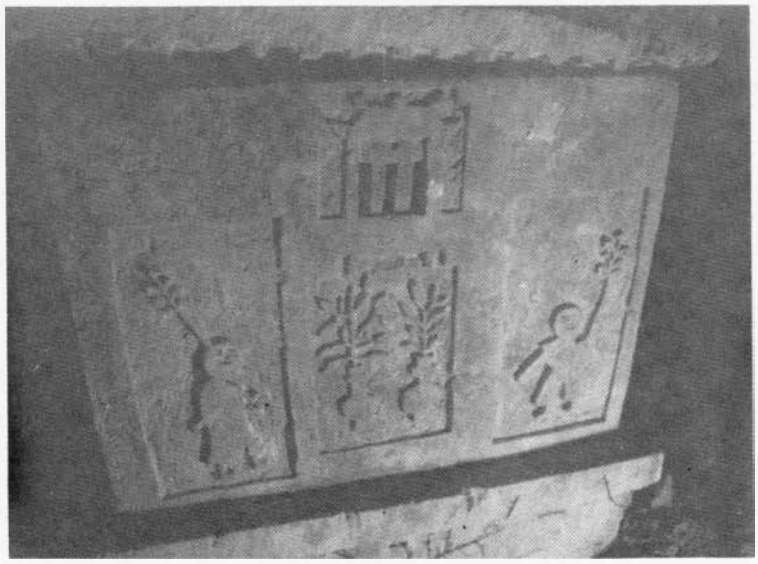
正面身、穴２個、朱線が入っている。蓋片隅が破損。中には骨片あり、その他の雑物が混入している。蓋の破損は比較的新しい傷跡である。銘などなし。

（墓の内部）

② 入母屋式石製厨子（石灰岩製）



身　　幅 43　横 51 ㎝
蓋　　幅 47　横 61 ㎝
身前面、二ケ所に文字、刻文あり。
寛文 4 年（1664年）



原文

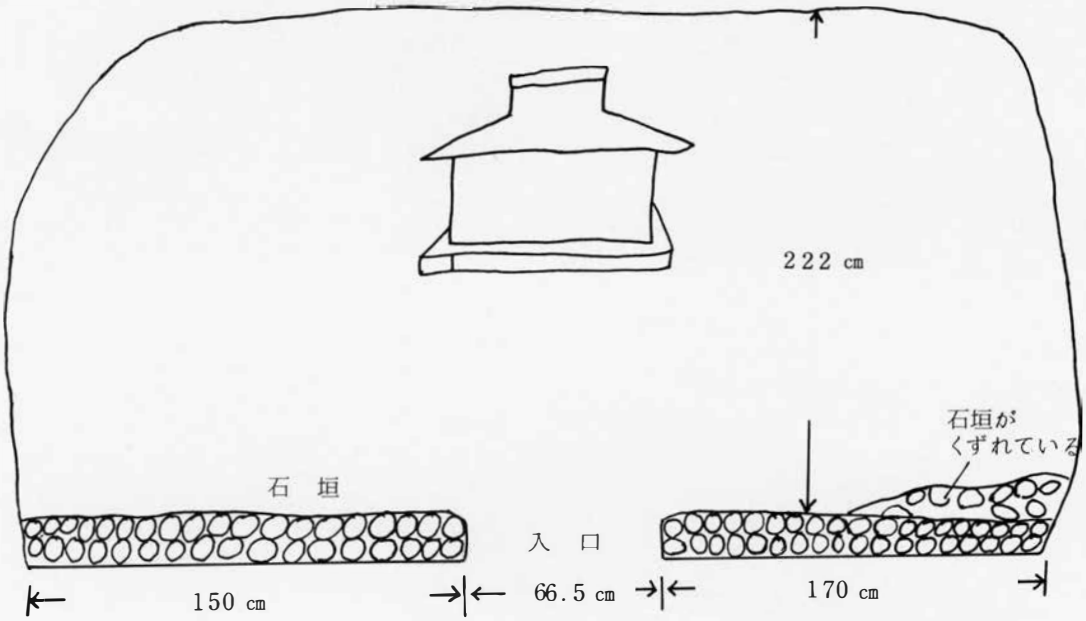
大あむし かト
くとし 戊十月
島かきとけト
日六日ノ・まの
ロロロロ申候
大しの女る
大しは此三人
寛文四年 戊辰 十一月 廿二日 ・ 地しこ
とりきと申候

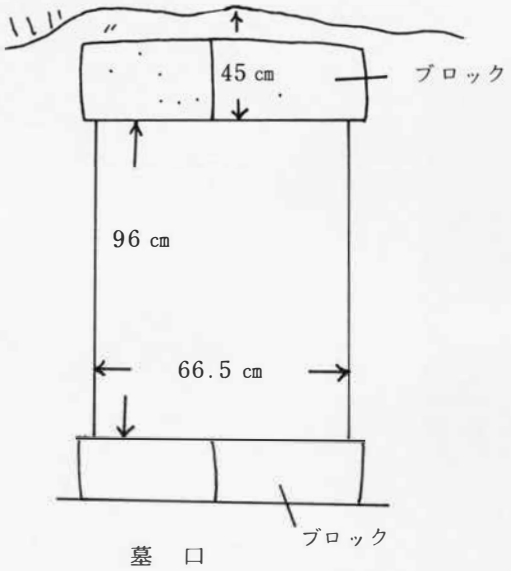
訳文

大あむし カケ申候
くとし 戊 十月
島かき申候
日六日ノうまの
ロロロロ申候
大ての 女子
一人は此三人
寛文四年 申辰 十一月 廿二日 ・ 地しこ
(一六六六年) とりきと申候

※ 訳文は一月二十一日、高良倉吉氏教示。

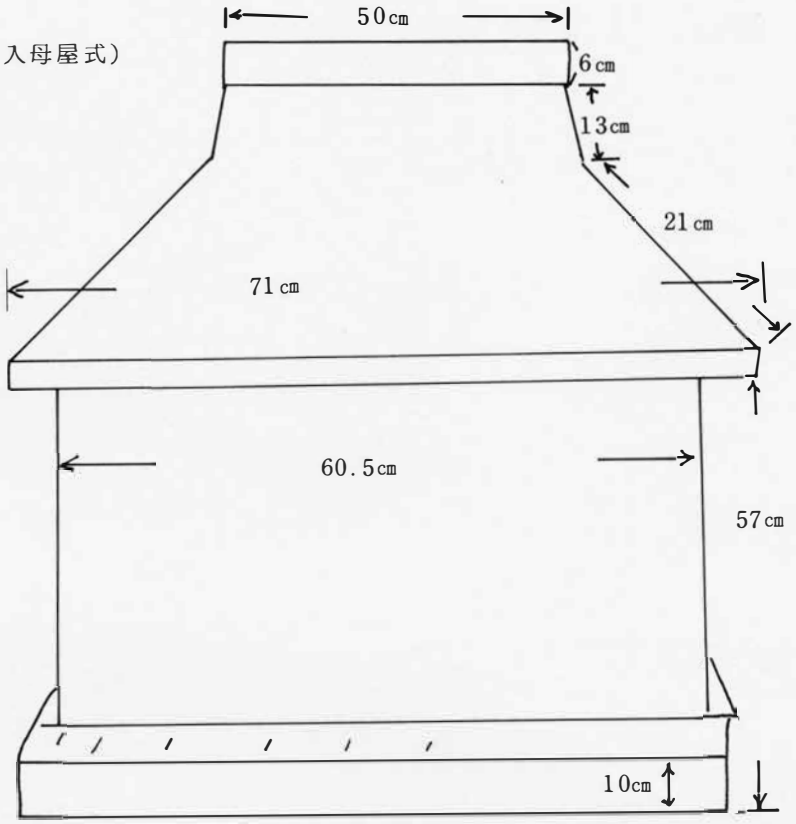
尚宣威の墓の向って左側の墓（俗にウナジャラの墓と称す）

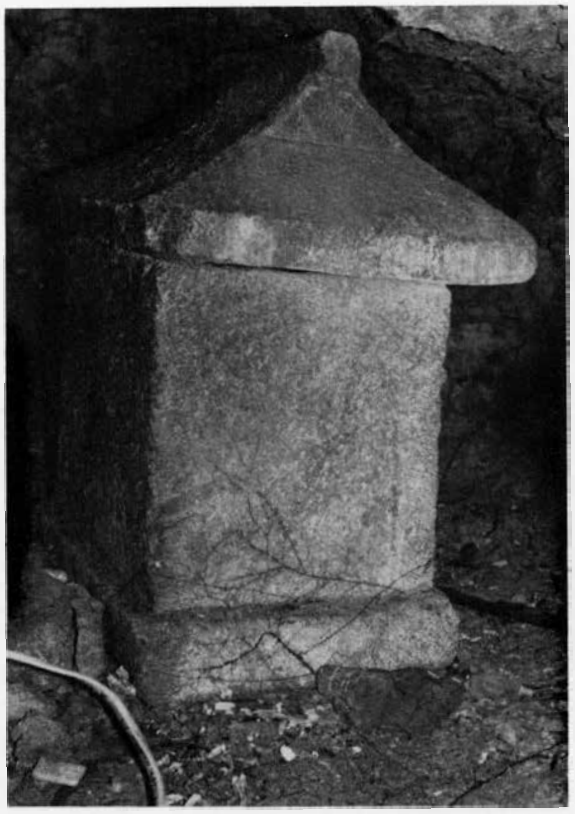




※ 墓の前面は切石積み、墓口はブロックで閉じてある。
中には、凝灰岩製の石棺1個あるのみ。

凝灰岩製厨子（入母屋式）





蓋　　たて56cm×よこ71cm

身　　たて42cm×よこ60.5cm×高さ57cm

銘なし、中には頭蓋片と長管骨あり。

尚宣威について

琉球歴史年表によると、尚宣威（尚円王の弟）は、1477年（中国年号成化13年、日本年号文明9年）48才で王位に即くも在位6ヵ月で、王位を尚真（尚円の世子）に譲る。神号「西の世の主」とある。

ところで、尚円王統は、19代、409年間つづいた。

尚円は、1470年（中国年号成化6年、日本年号文明2年）王位につくと、弟の尚宣威を越来間切の惣地頭として越来城に配置したので、尚宣威は「越来王子」と称されるようになった。ときに、尚円は56才、尚宣威は41才であった。

尚宣威は、越来王子として6ヵ年間、越来城ですごした。

ところが、尚円は、1476年、在位7年、62才で崩じた。その時、世子の尚真は、まだ13才の少年だったので、1477年、尚宣威は諸臣におされて王位をついだのである。

× × × × ×

在位6ヵ月で退位した尚宣威について、史家はいろいろ書いているが、「中山世鑑」によると、

成化12年（1476年）丙申7月28日、尚円公御在位7年、寿62ニシテ薨ジ給ヒ、世子久米中城王子嗣イデ立チタモフベカリシニ、群臣僉議アッテ、世子久米中城王子ハ今、幼少ニ御座ケル間、成長シ給フマデハ、御舎弟越来王子ヲ主君トシ奉ラントテ、即位シ奉ル。コレヲ尚宣威トナス。

と、あるので、尚宣威は尚真が成長するまでの王位継承ということであったのだろう。

尚宣威の王位交替にまつわる記録は、「神々のお告げ」と称する神意にしたがって行われたといわれ、「中山世鑑」には、

御即位ノ年ノ二月、陽神（キミテヅル）現レ給イケレバ、尚宣威コレハ必定我ガ慶賀（モモガホウゴト）ノタメニ、オリサセ給フ神ニテゾアラン、ト悦ビ思召シテ、オヌシ（大主）ハ帝座ニ伏セ給テ、久米中城王子（尚真）ヲバ帝座ノ脇ニゾ立セ給フ。旧例ニハ君々神々、内原（内殿）ヨリ出給フテ、キミホコリ（奉神門）ノ前ニ東西ニ立チ給ヒケルガ、今度ハ例ニ異リ、西面ニゾ立給ヒケル。サルホドニ、上君ヲ初メトシテ、下老男女ニイタルマデ、コレハ何事ヤアラント、肝ヲ冷シ、手ヲ握リ、カタズヲ飲ンデイタル処ニ、神記（ミセセリ）有ケルハ、

首里オワル王（テダコ）我ガ思子ノ遊ビ見物、遊ビ躍（ナヨ）レバノ見物、鷲ノ

羽差シ給ワチヘ。

ト、神歌ヲゾ召サレケル。尚宣威王聞召シ給フテ、我ソノ徳ニ非ズシテ、帝座ヲ汚シタルコト、コレ天ノトガメ有リケルゾヤトテ、在位6カ月ニシテ、御位ヲノガレテ、世子中城王子ヲゾ即位ナリ奉リ給フ。

と、ある。神歌の意味は「我が世子の欣喜雀躍し給うみ姿の美しさよ、鷲の羽をかざし給う御子こそ、我が王である。」ということで、我が世子とは、尚円の世子尚真を指している。

このことについて、中山世鑑で羽地朝秀は、

ヒソカニオモフニ、神ノ尚宣威ヲ廃シ給フハ、全ク世子ヲ廃シテ、自ラ立チ給ヒタルヲ悪ミ給フニハ非ザルベシ。タダ尚真公、聖ナレバナリ。

と述べている。

後世、伊波普猷氏は、この神の出現について、

この事件が、トキユタの差金によって起ったことは、大方推測することができるのであるが（中略）こうしたことが、400年前に、首里城内でも行われたのである。

尚宣威を退位させる時に出現したキミテズリも、その正体はまさしく人間であった。

と述べ、神の出現は、尚円王未亡人世添御殿（よそえおどん）が、内原の女官たちをかたらっての策略であったように匂わしている。（沖縄歴史物語・山里永吉）

ここで、世添御殿について「沖縄歴史物語」から要点を抜粋して見る。

「尚円王未亡人、つまり尚真王の母后、世添御殿は、そのとき32才の、権勢欲も、虚栄心も、十分もった女ざかりである。「王代記」によると、

尚円王妃、世添大美御前加那志、童名ハ宇喜也嘉（ウキヤカ）正統10年乙丑生、弘治18年乙丑3月初1日薨ズ。寿61。月光ト号シ、玉陵ニ葬ル。父ノ名ハ伝ラズ。

と、あり、尚円と30才も歳がちがうから、或は第何番目かの夫人であったのだろう。それにしても、尚円は、50才まで子供がなかった訳だから、はじめて世子尚真を生んだ世添御殿の権勢は、想像できる。したがって、彼女が、幼い尚真に代って尚宣威が即位したことに、不満をおぼえたのも当然であろう。（中略）世添御殿は、キミテズリを出現させて、尚宣威を越来に隠遁させ、尚真を王位につけると、みずからその後見として、政治をとっていたのであろう。いわゆる簾政である。

伊波普猷氏は、そういった世添御殿を評して、尚円王妃・ウキヤカ（世添御殿）は、尚円薨去のとき、30を1つ2つ越した位の女盛であったから、世の多くの貴族社会の未亡人に見るように、精力があり余って仕様がなく、とうとう、ヒステリックになって

いたのだろう。そのひとり息子の尚真は、13才で、王位に即いても差支えない年頃になっていたのである。それに政治家たちが、これを差しおいて、叔父の尚宣威を王位につけたものだから、彼女のかんしゃく玉は、ついに爆発して、キミテズリの出現となったのである。

と述べているが、そういった世添御殿に対して、尚宣威の意地のなさは、かえって彼女の嫌悪をあおりたてたようである。

尚宣威は、先王尚円のたった一人の弟である。したがって、尚円亡きあとは、とうぜん国政その他あらゆる点で相談にあずかるべき人物であった。ところが、王位を捨てた尚宣威は、越来に隠退すると、その年の8月に越来で亡くなっており、その墓陵も今のところわかっていない。(註・尚宣威王を祖先とする向姓、湧川門中では、字越来のセーシンジャー川のほとりにある古墳を尚宣威の墓としてあがめている。)

さて、キミテズリなる神は一体、どんな神であったか、琉球歴史夜話(源武雄)は、次のように記している。

「1477年(支那年号成化13年、日本年号文明9年)2月のある日のことである。国頭間切の辺戸のアフリ嶽という山に、飛行機の落下傘のようなものが二つ三つ現れた。赤い色のものや、黄色いものなど、遠方からもよく見えるほどの大きな傘で、傘のふちには房がついている。五色鮮やかに、山に浮んでいる光景は実に壮観である。

この山に突如として出現した大きな異様な傘を発見した附近の住民は、びっくりして叫んだ。

「神様が天降(あも)り遊ばしましたよー。」

「どれどれ、どこに?」

「ほれ、見ろ、アフリ嶽の上だよ。」

「あら、ほんとだ。まァ、きれいな、大きな傘だね、一本、二本、三本。」

「神様は、いつお出でになったのかしら。」

「ゆうべだよ。だって、昨日の明るいうちは何もなかったじゃないか。きっと、昨夜僕たちが寝しずまっているうちに、そっと天から降りて来られたんだよ。」

「あゝ、ありがたや、ウートート。」

突如たる天神の降臨に驚いていた村人たちは、やがて冷静をとりもどして、山上の大きな五色の傘に合掌した。そして、全戸に神様の出現をふれ廻った。辺戸部落は、もちろん、この神様出現の噂は忽ち次から次へと伝わり、沖縄中に拡がった。(中略)この村に天から天(あま)くだった神様の名は、キミテズリという神様であった。

この神様は、琉球王が即位すると、その即位を賀し、新しい王様に霊力をあたえ、かつ、新王の御世が大平になるように守護してあげるという使命をもって、首里城の正殿を訪れる神様であるが、王の在世中に、たった一度だけ訪れてくるという、いとも尊く、恐れ多く、そして又、珍らしいお客様であった。（中略）飛脚から、この報を受けとった首里王府では、尚宣威王の即位を賀して、王としてのセジ（霊威）を授けて下さる大神の出現だというので、王宮内は忽ち緊張した異常な興奮につつまれた。神託政治がまだ行われていたこの時代では、それは当然であった。この神様を迎える準備がすすめられた。（中略）

尚円王が即位した時にも、1473年（成化9年）3月9日に首里城を訪れて、尚円の即位を賀するオモロを唱ったので、尚宣威もその例にならい、正殿前の広場石段の近くに王の坐る王座を設け、多くの群臣を左右に待立せしめて、キミテズリの神が即位をことほぐオモロを唱うのを待った。

尚円王の長子である尚真は、この時まだ13才の幼年であったが、尚宣威王の側に椅子が置かれて、王の側に待立していた。

さて、いつもの例だと、神々たちは内原（後宮）から出て、カラハーフ（正殿）の前に現れ、王の王座に向ってならぶのであったが、今度はそれが前例と異って、神々たちは王座を背にして西面して並んだのである。この異例の光景を見た尚宣威王を始め、王妃、群臣まで、一体どうしたのだろう？と不審がって、これは、なにかあるなと直感して不安に顔をくもらせた。

すると、神の託宣が、オモロとなってうたわれ出した。そのオモロは、

「首里をはるてだこが
　をもひぐわのあそび
　みものあそび　なよればのみもの」

というのであった。（中略）

元来、このキミテズリ神が首里城を訪れてくるのは、新王の即位をことほぎ、王を讃美するために出現することになっているのに、今度は前例を破って、王座に背をむけた神々の列び方に不吉な予感がしていたところへ、託宣のオモロを聞いてみると、宣威王を讃美するオモロは少しもうたわず、王の側に立っている13才の幼い尚真を讃美するオモロを唱ったのである。

これを聞いた尚宣威王は、がく然として色を失ってしまった。キミテズリの神から見はなされたからである。居並ぶ群臣も動揺の色をかくし切れず、神女たちが式場か

ら退場すると、不安におそわれながら引きあげていった。世がわりを直感したからである。」

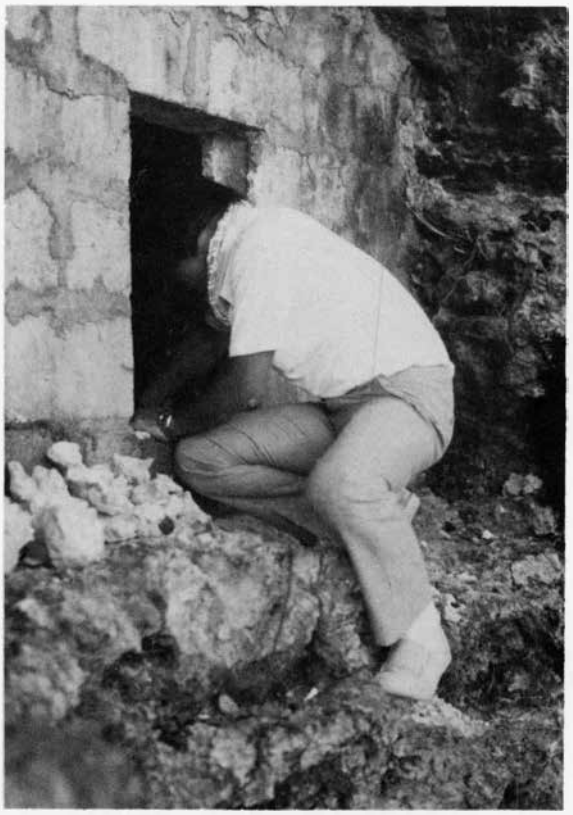
以上が、尚宣威の王位継承と、退位までのいきさつであるが、祭政一致の時代で、とくに、オキヤカ（尚円王未亡人）の策謀によって退位に追いこまれた尚宣威の晩年は、悲劇の人生として取り沙汰されている。

尚宣威は、1477 年王位についたが、キミテズリの神のご宣託で退位して越来城にひきこもり、その年の8月に病没したという。

ところで、越来のセーシンジャー川のほとりの断崖にある尚宣威王の墓を開けて調べたが、墓陵内には一基の石棺が置かれているだけだった。石棺には「阿母志良礼」の文字が見られた。

なお、尚宣威の墓について、その墓所の異説も出ている。その一つは、尚宣威の墓は、北谷城（ぐすく）にあるとする説、いまひとつは沖縄市の津嘉山森に墓所があるとする記録がある。

今後の調査が必要であろう。



この報告書を作成するにあたり、次の方々にお世話になりました。

読谷村立歴史民俗資料館
名嘉真　宜　勝

沖縄市文化財調査審議委員
青　山　洋　二

尚宣威王の墓

沖縄市文化財調査報告書第3集

昭和55年3月31日印刷
昭和55年3月31日発行

発行　**沖縄市教育委員会**
沖縄市字美里1,100番地

印刷　**㈲栄光堂印刷**
沖縄市字比屋根1426番地
℡ 098939－1341